

# 本校における評価の総括について

## 1. 観点別学習状況の評価の観点ごとの総括

- 観点別学習状況の評価のための総括の場面として、
- (1) 単元（題材）における観点ごとの評価の総括
  - (2) 学期末における観点ごとの評価の総括
  - (3) 学年末における観点ごとの評価の総括
- について以下の三段階で行う。
- A：十分に満足できると判断されるもの
  - B：おおむね満足できると判断されるもの
  - C：努力を要すると判断されるもの

### (1) 単元（題材）における観点ごとの評価の総括

単元（題材）において、具体的な学習活動に即して設定したいくつかの「学習活動における具体的な評価規準」ごとに評価を行い、観点ごとにそれらの評価結果を総括する。

総括の方法は、最も数の多い記号がその単元（題材）における学習状況を最もよく表しているとの考えに立ち、例えば評価規準の数が三つあり、それぞれの評価規準に照らして行った評価結果が「A、A、B」なら「A」と総括する。

また、教科によっては、指導のねらいや授業時数・評価方法等に応じて、評価規準に重みを付ける場合もある。この場合「A、A、B」でも、「知識・理解」の評価規準に重みが置かれていれば、最終的な評定が「B」となることもある。

このほか、教科における学習活動や評価の観点の特性を踏まえ、学習の途中段階において行った評価結果や学習の最終段階において行った評価も考慮して総括するようにする。

### (2) 学期末における観点ごとの評価の総括【通知表】

学期末における総括については、(1)で総括した単元（題材）における観点ごとの評価結果をもとに行う。

学期末における観点別学習状況の評価（「A、B、C」）を導く総括の方法としては、上記(1)と同様の考え方に立つ。なお各評価については、学習の最終段階の評価のみでなく、途中段階の評価がおろそかにならないように配慮する。

	単元	単元	単元	単元	通知表	・・・途中、略・・・								通知表		
知識・技能	A	A	A	B	A							A	B	C	C	C
思・判・表	A	B	A	A	A							B	B	C	C	C
態度	A	A	B	A	A							C	C	C	C	C

### (3) 学年末における観点ごとの評価の総括【指導要録】

各学期末における評価結果をもとに行う。学年末における観点別学習状況の評価（「A、B、C」）を導く総括の方法としては、上記（1）と同様の考え方で行う。

なお、知識理解・技能表現にCがひとつでもある場合は、AではなくBとする。

知識・技能	A	A	A	B	A	B	B	B	C	A	A	A	B	C	C	A	B
思・判・表	A	B	A	A	B	A	B	B	A	C	A	B	A	A	B	C	C
態度	A	A	B	A	B	B	A	B	A	A	C	C	C	B	A	B	A
総括	A							B									

知識・技能	A	C	C	B	C	C	C
思・判・表	C	A	C	C	B	C	C
態度	C	C	A	C	C	B	C
総括	C						

## 2. 観点別学習状況の評価の評定への総括

### (1) 観点別学習状況と評定の表示

観点別学習状況については、現行の指導要録と同様次のように三段階で評価する。

A：十分に満足できると判断されるもの

B：おおむね満足できると判断されるもの

C：努力を要すると判断されるもの

また、評定については、3段階で評価する。

3：十分に満足できると判断されるもの

2：おおむね満足できると判断されるもの

1：努力を要すると判断されるもの

### (2) 観点別学習状況の評価の評定への総括の考え方

- ① 観点別学習状況の評価の評定の総括については、学年末に総括した観点別学習状況の評価結果を総括し、評定とする。総括においては、3種類の重点の置き方にかかわらず、3観点の評価（「知識・理解」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」）が「A、A、A」であれば、評定は3  
「B、B、B」であれば、評定は2  
「C、C、C」であれば、評定は1を基本とする。

- ② 観点別学習状況の評価においては、各教科の学習活動の特質・評価の場面や評価基準、児童の発達段階に応じたペーパーテスト・ワークシート、学習カード、観察、面接、質問紙、作品、ノート、レポートなどの様々な評価方法の中から、その場面における児童の学習の状況を的確に評価できる方法を選択していく。

また、評価が学期末や学年末などに偏ることのないよう、評価の時期の工夫や学習の過程における評価を重視するなど、評価の場面についても工夫を加える。

③ ペーパーテストについては、一般に学習の実現状況を客観的に示すものと受け止めがなされており、このことが評価方法としてペーパーテストを重視することにもつながっていると考えられる。ペーパーテストは、評価方法の一つとして有効であるが、ペーパーテストにおいて得られる結果が目標に準拠した評価における学習の実現状況をただちに表すものではないことについて、改めて認識する必要がある。

そこで、ペーパーテストにおける設問の狙いを明確にし、個々の問題を正答したのか・正答しなくてもどこまで解答できたのか・全体では何割の正答を得たのか、といったことが学習の実現状況と結びついて解釈できるよう、問題内容をさらに工夫・改善することが求められている。

さらにペーパーテストについては、「知識・理解」の評価に偏ることなく、「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の評価も含め、児童の資質や能力を多面的に把握できるようにしていくことが大切である。

知識・技能	A	B	A	A	C	A	A	C	C	A	B	A	B	A	C	C	B	C	C	C
思・判・表	A	A	B	A	A	C	A	A	B	C	C	B	A	C	A	C	C	B	C	C
態度	A	A	A	B	A	A	C	B	A	B	A	C	C	C	C	A	C	C	B	C
評 定	3			2									1							